

ブック・アートという語から人は何を思い浮かべるだろう。印刷されて多くの人が手に取る本と、元来はただ一つしかない存在として人と対峙してきた美術。異なる目的を担ってつくられる両者が結び付くとき、そこには何が生まれるのか。その模索の中で、1990年代から30年余りにわたり、私は本にまつわる美術と関わり続けてきた。本論ではそうした私の体験をもとに、ブック・アートの核心と周縁を探っていく。

私が本にまつわる美術と深く関わるきっかけとなったのは、1994年、本をテーマとした作品展を「THE LIBRARY」と名付けて開催したことによる。1992年に東京の神宮前で Gallery ART SPAC (註1) を設立した私は、日本で誰も手がけていないような企画を希求する中で、一人の作家が一点、それぞれが考える本のかたちで作品を制作する展覧会を開催したいと考えた。この着想をもとに、美術、工芸、イラストレーション、絵本、写真、映像、文学の各ジャンルで創作を行う54名に作品制作を依頼し、1994年7月19日～7月31日に自身のギャラリーで開催されたものが、「THE LIBRARY」の第1回展だった。この展覧会は、京都のギャラリーそわか (註2) より巡回展の申し出を受け、翌1995年、無審査の公募であるアンデバンタン展に形式を変えた80名による「THE LIBRARY 1995」が東京と京都で開催され、両ギャラリーによる巡回展は、2005年まで11年間にわたって継続された。

「THE LIBRARY」は年ごとに参加者を増やし、127名による1998年の「THE LIBRARY 1998」(註3) では、東京と京都のほか、広島、福岡、名古屋、仙台の4都市を加えて3ヶ月半以上におよぶ巡回展を開催。札幌にも巡回した2002年の「THE LIBRARY 2002」(註4) では195名、2003年には225名の参加者を数えた。こうした巡回展の開催にあたっては、観覧のしやすさと輸送にあたっての作品の携行性を考慮して、出品作品は一名一点、サイズは作品を閉じた状態で30.0cm×24.0cm×12.0cm以内という出品規定を設定した。

ところでこの展覧会は、原則として、展示される全ての作品を来場者が手に取り観覧できることを大きな特徴としている。それは、手に取りページを手繰ることで読者は様々なものを享受できるという本の在り方を、美術としての本にも求めたことによる。加えてもう一つの特徴は、展覧会の立ち上げ時、全作品に、本のかたちに寄り添いながらも、オブジェ＝物体の要素を含むことを望んだという点である。これは、作者が持つ創作のエッセンスが、本のかたちを持つ一個の物体として凝縮される姿を理想としたことによる。つまり、一つのオブジェ＝物体でありながら、触れて開かれることを併せ持つ作品こそが美術に新たな道をもたらすと、当時の私は考えたのだ。また、本にまつわる美術とは本来無縁であった様々なジャンルの表現者に、あえて本の形式で作品の制作を提案し、この分野を底辺から拡張させようとしたことも、この展覧会が目指した目標の一つに挙げられる。

こうした理念をもとに始まった「THE LIBRARY」は、開始から10年を経て次の段階へと移行した。それは、作品が手に取られることが希な施設である美術館へ、観覧者が作品に触れられることを原則とする展覧会を提案し、実現させることだった。その結果、各ジャンル46名の作者に制作を依頼した作品によって、多摩美術大学美術館と足利市立美術館を巡回した「THE LIBRARY」(註5) が2006年に開催され、さらに2009年、45名の作品による「THE LIBRARY -本になった美術-」(註6) が静岡アートギャラリー (現・静岡市美術館) で行われた。また海外でも、2009年、シンガポールの Japan Creative Centre にて「Artists' Book Exhibition : Centre to Periphery」(註7) が、2025年にはアメリカ合衆国カリフォルニア州の Sonoma Valley Museum of Art にて「Book

Becoming Art」(註8)が行われた。

こうした中でもアンデバンタン展としての「THE LIBRARY」は、Gallery ART SPACE が活動を終了した後の2006年以降も、同じ神宮前地区にあるToki Art Space(註9)で毎年続き、また京都でも不定期にMEDIA SHOP gallery(註10)で展示が行われ、直近では2025年8月、第32回展にあたる「THE LIBRARY 2025」が91名によって実施された。

ここまで、私の企画による「THE LIBRARY」について振り返ってきたが、後半部ではこれらの体験をもとに、本にまつわる美術について考察を進めていきたい。

まず検証したいのは、ブック・アートという語の定義である。本論では「THE LIBRARY」に関する記述の中で、あえてブック・アートではなく、「本にまつわる美術」などと記してきたが、それはブック・アートの定義が美術の中で確定されていないと思われるためである。その点をあらためて確認したい。

本と美術との関わりの歴史をひもとくと、古くは宗教の経典や歴史を記したものなどに収めた挿画から始まり、印刷の時代を迎えて書物が量産され、さらに20世紀初頭、当時を代表する様々な美術家が、自身の表現をもとに装丁やデザインを手がけた本の歴史へとつながっていく。時代は進んで1960年代、芸術の日常化を目指して商品のようには作品が大衆の中に流布することを提言の一部としたフルクサス(註11)は、複数や多数を意味する「マルティプル」(註12)の思想をもとに、複製と携行、低価格での販売が可能な、本など印刷物の形式による表現を推進させた。それは、美術家が表現の一環として制作に携わった本と定義されることが多い「アーティスト・ブック」(註13)という概念を確立させ、本と美術の関係は、「美術家がつくった本」から「美術としてつくられた本」への転換が遂げられたのである。

本と美術をめぐるこの革新は美術家の心をとらえ、その概念は時を重ねながら、欧米から日本など世界各地へと広がっていった。こうした過程では、ページを重ねた本の形態から脱却し、紙ではない多種多様な素材が使われるなど、表現の拡張が加速する中で、様々な手法、かたち、思想をもとにした制作が行われるようになり、既存の「アーティスト・ブック」の枠組みには収まり切らない表現が生み出されるにいたった。それは、美術としての本をつくることから、本という存在の核心を美術の中で表することへの深化でもあり、こうした本と美術との融合をも含め、本にまつわる美術を総称するのに相応しい語が、「ブック・アート」ではないかと私は考えている。

本にまつわる美術の核心と周縁を含んで成り立つブック・アートの概念。その本質を語る際、私は、「手の中に収まる空間に作者の世界観が広がる小宇宙」ということばを使ってきた。たとえば数十点を超える絵画が展示された美術家による個展会場と、各ページがそれぞれ作品一点ずつに見合う意義を持つブック・アートの両者を、等価のものであると仮定すると、美術としてつくられる一点の本が、広大な空間の個展にも匹敵する可能性が生まれる。その中で、ブック・アート作品の各ページは、一人の美術家が持つ世界観の表れでもある、創造のエッセンスとしての意味を担い、鑑賞者がこれを手にとって手繰る、その手の内には、作者の世界観を表す小宇宙がつかみ取られると仮想したのである。

本論では、「THE LIBRARY」とブック・アートという、本と関わりを持ちながら対極にあるものについて考察してきたが、本にまつわるあらゆる表現の垣塙ともいえる「THE LIBRARY」の出品作品は、ブック・アートとは別種の存在なのか。それともその底辺を支えるもののなのか。多種多様な出品作品の中で、そうした視点をもって両者を関連付けられるものの一つが、ブック・アートの周縁に位置するとも思われる、いわば個人出版

物としてつくられる作品である。そして、こうした作品の背景を探るとき、日本における個人出版文化の進化や、その関連の中でサブカルチャーが変遷する様相が透けて見えてくる。

もともと日本には、文学を主とする同人誌の文化があり、1960年代以降は写真やコミックなど視覚表現の分野も加えて大きく成長していく。一方、戦後における社会運動とも関連して、ミニコミ誌と呼ばれる自主刊行物による文化が生まれ、これも1960年代以降、同人誌と併走するように成長を続けた。流通のシステムも含めた日本の出版文化に対抗するかたちで発展したとみられるこれらの刊行物は、その多くがグループもしくは団体でつくられる性質を含んでいたといえるが、1990年代に入ると、個人が自身の嗜好や表現をもとにつくった刊行物が、主にサブカルチャーを背景にして流通を始めるようになる。流通については、初期は同人誌やミニコミ誌などを扱う模索舎（註14）やタコシェ（註15）などの専門書店が牽引し、同種の書店の増加に伴い販路が広まっていった。また、「コミケ」（註16）と呼ばれ、同人誌販売イベントとして今や世界に名が知られるコミックマーケットの発展も、誰もが本をつくり得る状況を促進させたという点で、個人による出版物の流通や、その文化に少なからず影響を与えたと思われる。

こうした背景には、1990年代後半以降から2000年代前半にかけての、Windows95やiMacなどの発売を受けたパーソナル・コンピュータの低価格化や、コンビニエンスストアでのカラーコピー機の普及、今や大きな発展を遂げたオンデマンド印刷（註17）の登場など、個人が簡易かつ廉価で印刷を行える環境の整備もあるといえるだろう。

個人出版の文化は、2000年代に入ると新たな展開を迎える。ここでは定義や詳述を控えるが、リトルプレスやzine（註18）と呼ばれる、多種多様なジャンル、印刷形態による個人出版物がつくられ、今にいたって大きな発展を遂げることになる。その制作のおおもとには、個々人が自身の表現をもとにして本をつくるという、ブック・アートの根幹と、表現の方向性は異なりながらも、重なり合う部分があると私は捉えている。

「THE LIBRARY」で展示されてきた作品にも、こうした出版文化の範疇に含まれるものや、同様の趣旨をもって制作されたものが多く含まれ、近年は増加を続けている。そうした点で「THE LIBRARY」の作品は、zineなどと同じく、ブック・アートの周辺にあってゆるやかに関わりを持ちつつ、その底辺を支え得るものであるということが、様々な作品と関わり続けてきた私の実感である。

ブック・アートの拡張と深化は現在もまだ続いている。その在り方はこれからどのように移り変わっていくだろうか。生の時間が許す限り、それを見届けていきたい。

#### 註

1. Gallery ART SPACE：1992年から2005年まで、篠原誠司が東京都渋谷区神宮前3-7-5-4Fで運営したアートギャラリー。通常のギャラリーのほか会場内にて、トイレを利用した「ART SPACE LAVATORY」、本棚を利用した「ART SPACE bis」を企画展示スペースとして併設した。会場外では、名刺入れを利用した携帯できる極小ギャラリーとして「ART SPACE LIFE」を展開した。閉廊後は、東京都町田市にて2009年まで、百葉箱を利用したギャラリーを屋外に設置して運営。2009年以降、埼玉県さいたま市にて、ART SPACEとしてブック・アート展を中心に展覧会企画活動を行っている。
2. ギャラリーそわか：1992年から2006年まで、平田加寿子が京都府京都市南区東寺門前町90で運営したアートギャラリー。地上2階地下1階で合わせて4つの展示室を併設した。
3. 「THE LIBRARY 1998」：東京・Gallery ART SPACE、広島・アーツスペース HAP、福岡・

アートスペース貌、京都・ギャラリーそわか、名古屋・カノーヴァン、仙台・ギャラリー一週間アートの6ヶ所で順に開催。

4. 「THE LIBRARY 2002」：東京・Gallery ART SPACE、京都・ギャラリーそわか、札幌・this gallery の3ヶ所で順に開催。

5. 「THE LIBRARY」：2006年4月22日～6月4日に栃木県足利市の足利市立美術館で開催された後、同年6月10日～7月2日に東京都多摩市の多摩美術大学美術館で巡回開催。

6. 「THE LIBRARY -本になった美術-」：静岡県静岡市の静岡アートギャラリーで、35名の作家に作品制作を依頼した上で10名を公募して計45名を選び、2009年11月14日～12月20日に開催されたブック・アート展。この内の7名が静岡アートギャラリーの企画で、個展形式の展示として「この場所で 一終わりと始まりをつなぐ、しずおかー」を行い、展覧会全体のタイトルは「THE LIBRARY+この場所で」とされた。「THE LIBRARY -本になった美術-」は、2010年4月10日～6月13日、足利市立美術館でも「THE LIBRARY ASHIKAGA」として展示が行われた。

7. Artists' Book Exhibition : Centre to Periphery : 2010年5月8日～5月21日、南洋理工大学とGallery ART SPACEの共同企画によって、在シンガポール日本大使館が運営するギャラリーで開催された展覧会で、日本側は18名が出品。

8. Book Becoming Art : 2025年1月18日～4月27日、18名のブック・アート作品によって開催。

9. Toki Art Spasce : 2005年よりトキノリコが東京都渋谷区神宮前3-42-5-1Fで運営するアートギャラリー。

10. MEDIA SHOP gallery : 京都府京都市中京区大黒町44 河原町VOXビルで1981年より営業を続け、関西ではアート書籍専門店の先駆けとして知られるMEDIA SHOPに併設されたアート・ギャラリー

11. フルクサス : FLUXUS。1960～70年代、欧米を中心に、美術家、作曲家、デザイナー、建築家、詩人、パフォーマーなどが領域を横断して活動を行ったアート・ムーブメント。

12. マルティプル : multiple。複数や多数を意味する語。

13. アーティスト・ブック : 広義では画集などの美術書も範疇に含むが、美術にまつわる本の領域では、美術家が表現の一環として制作に携わった本を表すと思われる。

14. 模索舎 : 1970年より、「持ち込まれたらどんな出版物も販売する」ことを掲げて東京都新宿区で営業を続け、同人誌やミニコミ誌などの自主流通本を扱う書店の先駆けとして知られる。

15. タコシェ : 1993年に東京都新宿区で『月刊漫画ガロ』（青林堂刊）のアンテナショップとして開店した後、1995年より東京都中野区の中野ブロードウェイで営業を続け、コミックやサブカルチャーの自主流通本を扱う書店の先駆けとして知られる。

16. コミケ : 1995年から始まり、現在は世界最大の同人誌即売会として知られるイベントで、現在は東京国際展示場（東京ビッグサイト）にて、毎年8月と12月、「夏コミ」、「冬コミ」として開催。2025年8月に開催された「コミックマーケット106」では、約23,000組が参加し、約250,000人が来場したとされる。

17. オンデマンド印刷 : 製版を行わずに直接デジタルデータから出力する印刷の方法で、オーダーごとに少部数を短時間で安価に作成できる特徴を持つ。

18. リトルプレスやzine : 欧米からの影響も受けて命名された、主に簡易で自由な印刷および製本でつくられる自主流通本の一形態。